

No.28



2014.6

● 巻頭言	研究科長	子安 増生	2
● 研究ノート			
教員から	教授	岡野 憲一郎	3
院生から	生涯教育学講座	福井 佑介	3
● 社会人院生から	教育認知心理学講座 博士後期課程1年	石川 敦雄	4
● 留学生から	心理臨床学講座 修士課程1年	方 建欽	4
● 学部生から			
現代教育基礎学系 4回生		菅 琴音	5
教育学部教育心理学系 4回生		水野 和	5
相関教育システム論系 4回生		星野 耕大	5
● 臨床教育実践研究センターから			
臨床心理実践学講座 教授・臨床教育実践研究センター長		松木 邦裕	6
● 教育実践コラボレーション・センターから	臨床教育学講座 教授	矢野 智司	6
● 野殿・童仙房地域活動報告	臨床教育学講座 教授 西平 直・研究員	辻 喜代司	7
● 若手研究者出版助成事業			8~9
● 事務室から	総務掛長	古屋 比奈	10
● 諸記録			10~13
①おもな出来事 ②入試結果 ③学位授与件数 ④教育職員免許状取得状況 ⑤人事異動			
⑥科学研究費補助金 ⑦外部資金受入 ⑧ハラスメント防止に関する研修会			
● 諸報			14
新任教員・事務職員紹介			

### 「グローバル」考



研究科長 子安 増生

私は、本年4月から教育学研究科長・教育学部長を拝命しました。どうぞよろしくお願いいたします。折しも、大学は改革の嵐が吹き荒れ、大樹のほすの京都大学も風雨に吹きさらしの状態です。こういう時にこそ、教職員が一丸となって、困難な問題に立ち向かっていかなければなりません。それと同時に、受け身で雨風に耐えるだけでなく、将来のビジョンを考えることが大切です。

大学改革の嵐の一つは、「グローバル」という語に集約されるでしょう。文部科学省は、今年度から「我が国の高等教育の国際競争力の向上を目的に、海外の卓越した大学との連携や大学改革により徹底した国際化を進める、世界レベルの教育研究を行うトップ大学や国際化を牽引するグローバル大学に対し重点支援を行う」スーパーグローバル大学創成支援事業を実施することになりました。世界の大学ランキングの100位以内を目指す「トップ型」10大学と、先進的な研究や取り組みで国内の大学のモデルとなる「グローバル化けん引型」20大学に多額の補助金が支出されます。

この「スーパーグローバル」の前には何があったかという点、「我が国の大学院の教育研究機能を一層充実・強化し、国際的に卓越した研究基盤の下で世界をリードする創造的な人材育成を図るため、国際的に卓越した教育研究拠点の形成を重点的に支援し、もって、国際競争力のある大学づくりを推進することを目的とする」グローバルCOEプログラムが実施されました。本研究科でも、私が代表者となり、「心が活きる教育のための国際的拠点」を平成19年～23年度に実施しました。このプログラムの資金のお蔭で大学院生が国際的に活躍する素地が形成されましたが、その時に痛感したことは、補助金の支給対象が博士課程の大学院生に限定されるという不条理性でした。博士課程の教育が修士課程と学部教育の基礎の上に成り立つものである以上、9年一貫の制度になっていることが本来的に望ましい姿と言えます。

ところで、このようなプログラムでは、「グローバル」の意味をどのようにとらえてきたのでしょうか。「グローバル」の前によく使われたことばは、「インターナショナル」です。上記の2つのプログラムでも、

「国際競争力」「国際化」「国際的に卓越」と「国際」ということばが躍っています。しかし、「インターナショナル」と「グローバル」とでは、観点がかなりちがいます。インターナショナルは、国家という枠組みを前提とした国家間の関係ということであり、狭義にはフランス革命に端を発する19世紀以後の国民国家の成立を前提とすることばです。他方、グローバルは球体(globe)である地球のことをさすので、国家という枠組みを議論の必須の前提とはしていません。

言い換えると、グローバルは国境を越えたボーダーレスの現象を捉えることばです。そういった問題は、国民国家の成立以前から存在します。たとえば、気候変動、渡り鳥などの移動生物が運ぶ感染症、大気汚染と海洋汚染、河川の治水利水などは、国境を越えるグローバルな問題です。経済学では、財の移動(貿易)に比べると資本の移動(投資)はボーダーレスです。最近話題になったビットコインもボーダーレスの通貨システムのようなのです。

気候変動について言えば、1789年に始まったフランス革命の渦中で、王妃マリー・アントワネットが「パンがなければブリオッシュ(菓子パン)を食べればよい」と言って庶民から怨嗟の声があがったとされますが、小麦がとれなくなったのは、1783年の浅間山の噴火による火山灰とガスが長期間にわたって太陽光を遮り、世界的凶作を引き起こしたのが遠因という説があります。「ブラジルの蝶の羽ばたきはテキサスの竜巻を引き起こすか(Does the flap of a butterfly's wings in Brazil set off a tornado in Texas?)」というのはカオス理論の有名な文句ですが、地球の各地で起こる現象の間の緊密な関係を前提にして考えなければならぬというのがグローバルな視点に他なりません。

教育の世界もインターナショナルな視点からグローバルな視点に眼を移すべき時代です。たとえば世界の大学ランキングの100位以内を目指すといったことばかりでなく、高等教育がいかんして世界中の人間の幸福をもたらすものになりうるかを考えることがグローバルな視点に他ならないのです。



## 教員から

臨床心理実践学講座 教授 岡野 憲一郎

平成26年4月より、臨床心理実践学講座を松木邦裕先生、松下姫歌先生とともに担当させていただくことになりました。どうぞよろしくお願いいたします。

私はこれまで精神科医として、そして臨床心理の教員としての経験を積んでまいりました。過去10年間は、国際医療福祉大学大学院の臨床心理学専攻での教職、および同大学の関連病院での精神科の臨床が主たる業務でした。その意味では教育や研究と臨床をバランスを取りつつ行い今に至っています。私の関心領域はかなり漠然と広がっておりますが、理論としては精神分析理論、トラウマ理論、臨床としては心的外傷に関連した障害（PTSD、解離性障害）および対人恐怖の治療等に特に関心があります。

私の臨床及び研究スタイルはかなり実証主義的であると考えています。と言っても決して大げさなものではなく、自分の体験に結び付けて納得のいくものを取り入れ、またクライアントにとってわかりやすく、有効に活用できると判断されるものを提供するという方針を

取っています。その際その理論的背景やそれにまつわる慣習にはあまりこだわらない主義で、結果的に精神分析理論だけでなく、認知行動療法や薬物療法なども有効である限りは用いるという立場です。最近の脳に関する最近の知見についても同様で、それが有効であれば取り入れたいと思っています。

私の教員としての業務は過去の10年間に限られていますが、そこで理解したのは今述べたようなクライアントへの態度は、基本的には心理の学生についても同じであってよいということです。このようなことを書けば学生を患者扱っているといわれそうですが、相手に役に立つものなら提供するという姿勢が共通しているということです。そのような私の臨床及び教育スタイルはともすると一貫性に欠け、理論的な裏付けに乏しいというお叱りを受けることもあるかと思いますが、以上のような事情をご理解の上お付き合いいただければ幸いです。



## 院 生 から

生涯教育学講座 福井 佑介

私は、生涯教育学講座の図書館情報学研究室に所属しています。図書館に関する規範に興味があり、卒業論文では、図書館裁判の中にみられる法規範の移り変わりを扱いました。修士論文では、図書館界の自律的規範を示す文書に込められた思想を明らかにしました。現在は、図書館界の規範の歴史的展開を扱う、博士論文のための研究に取り組んでいます。

さて、インターネットの登場以前、とりわけ活字媒体に関して、図書館は情報を得るための最後の砦だったといえるでしょう。しかし、インターネットの登場によって、社会全体に流通する情報量は増加し、人びとの情報探索行動は大きく変容しました。その結果、情報の流通過程において、図書館のカバーする範囲は、相対的に小さくなりました。（当然のことながら、本学の図書館にみられるような豊富な資料は、依然として研究の基礎として重要ですし、特に文系の学問には、ブラウジングも欠かせません。）

一方、最近では、図書館に関するトピックがニュー

スとして取り上げられることが増えたように思います。図書館に所蔵する資料の取り扱いの是非や、図書館利用者のプライバシーに関する議論、資料の電子化、日本では目新しい図書館のデザイン・コンセプトなど、具体例を容易に想起できるのではないのでしょうか。なお、本学の付属図書館の一階にも、ラーニングcommonsが新たに設けられました。

こうした状況下において、図書館情報学では、図書館の実態や機能が、さまざまな分析視角から明らかにされています。しかし、図書館の在り方を方向付けているはずの規範については、ほとんど研究されてきませんでした。これまでの図書館が、単に貸出冊数の増加だけを目指していたのではなく、他の学問領域の知見を取り入れ、情報にアクセスする権利の保障を志向していたことを明らかにすることで、知の基盤を担う施設についての今後の議論に少しでも貢献できればと思っています。



## 社会人院生から

教育認知心理学講座  
博士後期課程1年 石川 敦雄

私の社会人生活は、この4月に21年目に突入しました。企業では、会社が抱えるさまざまな課題に取り組まなければならず、研究部門であっても1つのことだけをやり続ける訳にはいきません。私も20年間の研究活動で、さまざまなテーマに携わってきました。その中でもここ数年間は、「建築空間がそこに居る人のこころや行動に及ぼす影響を明らかにする」を自らの課題として、これと関連するテーマに取り組んできました。

ここで私が言うまでもなく、人間を対象とする研究は本当に難しく、壁に突き当たることの連続でした。そんなとき、ある図書館新築プロジェクトをきっかけに、学習や思考に関する研究を重ねてこられた楠見孝先生に巡り合いました。このプロジェクトのクライアントには、「勉強がはかどる学習室」をつくりたいという要望があり、私は設計者とともに頭を悩ませていました。そんな悩みをご相談させていただくため、楠見先生の研究室を訪れたときから、教育学研究科とのつながり

がスタートしました。もちろん、「勉強がはかどる学習室」は高いハードルであり、今もなお解決できている訳ではありません。しかし、楠見先生や院生の方々とのディスカッションを重ねるたびに、「人間のことをもっと深く学ぶことができれば、クライアントからの無理難題を解決し、そして自分自身のゴールにもいつの日か到達できるかもしれない」と考えるようになりました。そして一念発起し、仕事を続けながら「人間のこころ」について学ぶことにしました。

この春、教育認知心理学講座の一員になりました。この講座には、多彩な先生方と個性あふれる院生の皆さんがいらっしや、20年ぶりの学生生活は刺激的で、久しぶりにフレッシュな気持ちを味わっています。仕事と大学院での研究との両立はハードですが、「こころに寄り添い、こころを育む建築空間」をつくるというゴールに向かって研さんを重ねていこうと思います。



## 留学生から

心理臨床学講座  
修士課程1年 方 建 欽

日本に来てから、「はじめまして、方と申します。台湾から来ました」というセリフは今まで数え切れないほど言いました。大学から日本語を勉強し、日本語能力試験N1の資格を取りましたが、勉強すればするほど日本語は難しいと感じました。そして、最終的には「日本に行かないと日本語能力は上がらない」と考え、留学することを決意しました。

大学での専攻は地理学で、7年間中学校で社会科の教師をしていました。最初は地理学や社会科教育を研究するつもりでしたが、生徒からは、地理だけでなく、いろいろな相談を受けました。「中学校の先生？今の生徒は大変でしょうね」。私が中学校の教師になることを聞いた人は、よくこう言いました。確かに、中学生への対応はかなり大変でした。この7年の間に、リストカット、いじめ、性的虐待、不登校、ADHDなどの問題を抱えた生徒にもたくさん会いました。包み隠さず言うと、最初の一、二年、経験の浅かった私は、生徒に体罰

を加えたこともありました。しかし、その時のたいへん辛い経験のなかで、私はカウンセリングの重要性を切実に感じたのです。

そんな経験の後、生徒から「先生、ありがとう。気持ちが楽になった」「先生、この前、ちゃんと話を聞いてくれて、励ましてくれて、ありがとう」とよく言われるようになりました。また、在学中は「困った生徒」だった子たちが、卒業した後に会い来て、元気一杯に近況を報告してくれたことも少なくありません。そんな時は、「こういう子たちがいるからこそ、教師の存在意義もあるんだろうなあ」と思いました。今回京都大学の大学院に入学したのも、そんな生徒たちにもっと役立つカウンセリングや教育相談について研究するためです。

「一期一会」は私が一番好きな日本語の言葉です。これからの二年間、たくさん友達をつくり、お互いの経験や意見を交換することで、この京大との出会いを大切したいと思います。



## 学部生から

現代教育基礎学系  
4回生 菅 琴 音

私は高校生の頃に自閉症に興味をもち、障害をもつ子どもの教育について勉強したいと考え、教育学部に入学しました。専門的な授業を受けるうち、一口に「教育」と言っても、さまざまな方法論や価値観があることに気づきました。異なる関心をもつ同学年の友人との議論においても、同じ対象についてさまざまな角度からの意見を聞くことができ、新鮮な気持ちになります。取りとめのない話で笑い合えるだけでなく、勉学や将来への向き合い方について互いに刺激し合える仲間。彼らと出会えたことを嬉しく思います。

私自身は、子どもの育ちの支援を発達教育の方法論

から学びたいと考えています。研究室の先生方、院生の方々からは、最先端の研究に触れる機会をたくさんいただいています。入学する前に漠然と抱いていた「教育」や「発達障害」についてのイメージが、いかに固定観念に囚われたものであったかを実感する日々を過ごしています。今後はさらに研鑽を積み、教育現場に少しでも貢献できる人物になりたいと考えています。いよいよ最終学年となりました。周囲の環境、人々に恵まれていることに感謝し、これまで学んできたことを形にする1年にしたいと思います。



## 学部生から

教育学部教育心理学系  
4回生 水 野 和

時が経つのは早いもので、ついに大学での最終学年を迎えました。私たち4回生は、卒業論文について本格的に取り組む時期にさしかかっています。

私は本学の大学院（教育学研究科）進学を志望していますが、大学院入試において卒論は大きなウエイトを占めます。教育学部は卒論に非常に重きを置いていて、卒業に必須の要件となっており、また、卒論に係る単位も16単位とかなり多くなっています。

はじめ、テーマは決まったものの卒論というものをどのように進めていけばよいのか分からず途方に暮れていましたが、自分の興味や関心に基づいて一から研

究計画を練ることは実は初めての経験であり、苦勞をしつつも同時に面白さを感じているところです。卒論の構想を練るにあたって感じるのが、周囲の友人の洞察の鋭さや想像力の豊かさです。的確な指摘や自分では思いつかなかったようなアイデアを与えてくれて、話すたびに刺激を受けます。こうした仲間に囲まれていることは、京都大学に来たからこそであり、非常に恵まれたことだと感じています。

今取り組んでいる卒論が大学院での研究へとつながるステップとなるよう、しっかりと取り組んでいきたいと考えています。



## 学部生から

相関教育システム論系  
4回生 星 野 耕 大

京都大学に入学してからすでに3年が経過しました。自分の人生の中でこれほどあっという間に過ぎ、また密度の高かった時間は他にありません。

京都大学は「自由の学風」と世間で言われているように、他の大学と比較しても特に学生に大きな裁量が委ねられています。勉学に打ち込む人、サークルなどの活動に打ち込む人様々ですが、どのような生活を送りたいかをしっかり考えて選択していくことが重要だと思います。

さて、四回生と言えば卒業論文と就職活動という大きな出来事が控えています。どちらも上述した自分の選択の成果が問われる場所です。こうした機会に自分の学生生活を振り返る事は重要だと思いますし、充実した時間だったのだなとしみじみと感じています。また、自らの勉強不足を痛感させられる機会でもありました。

皆さんもこうした機会に直面した際に後悔しないような素敵な学生生活を送れることを祈ります。



## 附属臨床教育実践研究センターから

臨床心理実践学講座 教授 松木 邦裕  
臨床教育実践 研究センター長

皆様の日頃の暖かいご支援に感謝申し上げます。  
初めに、岡野憲一郎教授が2014年4月1日付で着任されていますことをご報告いたします。岡野憲一郎先生は東京大学医学部をご卒業後、臨床精神医学の研究を積み、フランス政府給費留学生としてのパリ留学を経て渡米され、15年の滞米期間に米国精神科専門医と米国精神分析協会精神分析家資格を取得されました。帰国後は国際医療福祉大学で教鞭を取られるとともに、臨床心理学や精神医学の分野で多大な業績を挙げられています。岡野先生の本学でのこれからの活躍が期待されます。

人事に関するご報告を続けます。心理相談室室長は松下姫歌准教授、こころの支援室室長は大山泰宏准教授によって担われています。また今年度の当センター外国人客員教授には、英国精神分析協会フェローで精神分析家であるInge Wise先生を招聘いたします。Wise先生は精神分析臨床のみならず、乳幼児の心的発達、戦争被害者研究等、広い視野からの卓越した研

究を続けておられる臨床家であり研究者です。2014年10月19日には市民に開かれた公開講座を予定しています。多くの聴衆が魅了されるに違いありません。

2014年のリカレント教育講座は8月10日に開催予定です。第18回目となる今回のテーマは「心の教育」を考えるいじめへの対応と心のケア」です。プログラムは、午前中に経験と見識共に豊かなシンポジストによるシンポジウム、午後には事例検討を四つの分科会で行います。濃い学びの一日になりそうです。

市民に開かれた臨床実践活動である心理教育相談室では、悩むこころへの援助の最前線として相談スタッフは全力を挙げてセラピーに取り組んでいます。東日本大震災被災者への支援活動を実践する「こころの支援室」は、在京都被災者の支援、福島での「京都子どものケアチーム」活動等、積極的な支援活動を続けています。当センターの諸活動に、引き続き皆様のご支援をよろしくお願い申し上げます。



## 教育実践コラボレーション・センターから

臨床教育学講座 教授 矢野 智司

### 有能性と生命性

教育実践コラボレーション・センターでは、子どもの生命性と有能性の育成を教育の基本課題として捉えています。私見を交えて解釈すると、この試みは、教育を経験によって有能性を高める発達の方向と、体験によって子どもの生命性を深める生成の方向との二重性において捉えることで、教育の原理を革新しようとする画期的なものです。

子どもの有能性を高めるという課題は、比較的理解の得やすい課題です。このとき、有能性の方は多くの場合において客観的な尺度によって計ることができるものです。それにたいして生命性を深めることは、それほど自明なことではありません。深い生命体験は驚嘆や感動を引き起こしますが、このような体験においては体験の中心であるはずの私は世界の方に溶解してしまっており、言葉によって言い表すことさえ難しくなります。本当に深く世界に専心しているときには、そ

の世界のことを概念的に言い表すことができないのです。詩や文学が実現しようとしてきた深い記述によって、かろうじて言い表すことができるものです。したがって生命性の方は客観的尺度はありません。外から観察することも困難なことですし、それを体験した本人にとっても以前と以後とを比較することは困難です。

しかし、他方で生命に触れたというこれほどたしかなくともありません。幼児だと遊びによって生命性を深めていきます。学校教育ではさまざまな教科によって、この体験を生起させる可能性に満ちています。このとき有能性は、芸術や音楽、科学や思想、遊びやスポーツといったメディアを介して生命性に触れるうえで大きな力となります。有能性は社会のなかで有用な価値を生み出す力にとどまらないのです。また反対に有能性は生命性から内在的な力を得ています。手段としての学習ではなく学ぶこと自体に歓びが生起するからです。この方向に狭隘な功利主義と民族主義を乗り越える力を育成することが可能となるはずで



## 野殿・童仙房地域活動報告

臨床教育学講座 教授 西平 直      研究員 辻喜代司

大学の「知」を地域に暮らす人々に伝えること。そして地域の人々から学ぶこと。つまり研究と地元の暮らしを交流させてゆく課題。私たち教育学部は南山城村の地域との交流を2006年以來続けています。人口が減り、高齢化が進み、子どもたちが少なくなっている地域に暮らす人たちとの共同企画。毎年、数回「野望いなか塾」が開かれます。例えば、昨年度は、こんな企画がありました。

6月には「初夏の自然観察会」。遠くに出かけたわけではありません。身近な見慣れた自然の観察会。ところが説明してもらおうと知らないことばかり。驚きの連続でした。8月には「演劇ワークショップ」。マリー・ホール・エッツの絵本『もりのなか』を題材にした子どもたちの演劇です。最後は、絵本の通り(!)、太鼓に先導されて、子どもも大人も全員が、本当の森の中に入って行きました。11月には「京大教育学部祭」に参加しました。地域で集めた木の実や木の枝を使ったクリスマスリースの手作り体験。とても好評でした。そしてこの3月には講演会。前研究科長・前平泰志先生を中心に早稲田大学名誉教授・鈴木慎一先生の講演。グローバル化への対抗軸となりうる知の在り方を求めて、活発な議論が展開されました。高齢化が進み、子どもたちが減ってゆく地域。そうした地域の課題から、日本の問題を、教育の問題を問い直そうとしています。



# 若手研究者出版助成事業

教育学研究科では、京都大学総長裁量経費を得て、優秀な若手研究者による博士論文の出版助成事業を行っております。本制度を利用して昨年度は6件採択されましたので、ご紹介します。

氏名	身分等	タイトル	出版社
小原 優貴	教育学研究科博士後期課程 平成25年1月修了 東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員	インドの無認可学校研究 —公教育を支える「影の制度」—	(株)東信堂
河井 亨	教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 立命館大学教育開発推進機構 講師	大学生の学習ダイナミクス —授業内外のラーニング・ブリッジング—	(株)東信堂
河野 一紀	教育学研究科博士後期課程 平成24年5月修了 滋賀大学教育学部 特任講師	ことばと知に基づいた臨床実践 —ラカン派精神分析の展望—	(株)創元社
小山 英恵	教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 鳴門教育大学大学院学校教育研究科 准教授	フリッツ・イェーデの音楽教育 —「生」と音楽の結びつくところ—	一般社団法人 京都大学学術出版会
塩原 佳典	教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 日本学術振興会特別研究員PD	名望家と〈開化〉の時代 —地域秩序の再編と学校教育—	一般社団法人 京都大学学術出版会
前原 由喜夫	教育学研究科博士後期課程 平成21年5月修了 長崎大学教育学部 准教授	心を読みすぎる —心の理論を支えるワーキングメモリの心理学—	一般社団法人 京都大学学術出版会



## 『インドの無認可学校研究 —公教育を支える「影の制度」』

教育学研究科博士後期課程 平成25年1月修了  
東京大学 大学総合教育研究センター 特任研究員

小原 優貴

経済発展を続けるインドでは、教育が社会的上昇の鍵とみなされ、貧困層の間でも教育熱が高まっている。しかし、政府の統制下にある公立学校は機能不全状態にあり、インドの低所得地域では、低額で教育を行う私立学校が、より質の高い教育を求める貧困層の教育ニーズを満たしてきた。これらの学校の多くは、政府の定める敷地面積や教員給与等の認可条件を満たせず、無認可学校として存続してきた。本書は無認可学校とそこに関わる各行為主体、そしてこれらの行為主体が無認可学校の存続・発展のために用いる非公式の規則や手順（影の規則枠組み）の総体を「影の制度」と捉え、インドの教育における「影の制度」の意義と役割、そこに反映される公教育制度の矛盾や欠陥の実態に迫る。

## 『大学生の学習ダイナミクス —授業内外のラーニング・ブリッジング』

教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了  
立命館大学教育開発推進機構 講師

河井 亨

本書は、「大学生の学びと成長」というテーマのもと、「大学生の授業外での経験と学習」と「授業での学習」とくその間の関係」からなる学習ダイナミクスについて研究したものです。まだまだテーマとして未開拓状態にある中、理論研究として学習理論・自己論・アイデンティティ形成論を掘り下げ、調査研究として具体的な教育実践調査研究と全国調査研究を組み合わせ、可能な限り多面的に上記の学習ダイナミクスに迫ろうと試みました。その結果見えてきたことは、学生が授業外活動の実践コミュニティを足場とし、その授業外での学びと授業での学びを統合していくラーニング・ブリッジングという学びと成長のかたちでした。「大学生の学びと成長」の実際や含意に関心のある方に手に取っていただければ幸いです。





## 『ことばと知に基づいた臨床実践 — ラカン派精神分析の展望』

教育学研究科博士後期課程 平成24年5月修了 河野 一紀  
滋賀大学教育学部 特任講師

ジークムント・フロイトが精神分析を創始してから120年余を経た現代社会において、ことばによるこころの治療の可能性をどのように考えることができるだろうか。本書は、このような素朴かつ根本的な問いから出発している。その道標となるのが、フランスの精神分析家ジャック・ラカンの思索である。人間にとって、言語は意味へと還元されえない重要性をもつことを、ラカンは無意識や解釈などの概念の革新を通じて示した。そこには、人間と言語との出会いが各々にとって特異かつ単独であるという考えがあった。今日では、心理学の知は体系化され、ますます均質性や普遍性を求められると同時に、こころの問題も生物学や行動科学の視点から理解されるようになってきている。こうした現状に対し、本書はあくまで話すことと聴くことに基づいた臨床実践の可能性について展望している。

## 『フリッツ・イエーデの音楽教育 — 「生」と音楽の結びつくところ』

教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 小山 英恵  
鳴門教育大学大学院学校教育研究科 准教授

このたび、「京都大学の平成25年度総長裁量経費 若手研究者に係る出版助成事業」による助成をいただくことで、2013年3月、京都大学より学位（博士・教育学）を授与された論文に加筆・修正を加え、本書を出版させていただくことができました。出版助成をいただきましたこと、また本書の執筆に関わりご指導を賜りました先生方、そしてご助力をいただきました多くの方々に、感謝の気持ちでいっぱいです。心より御礼申し上げます。

本書は、音楽は知られることではなく生きることを望むものであるとし、子どもの「真の生」が歌い出すことを求めたドイツの音楽教育家フリッツ・イエーデの音楽教育について研究したものです。拙い内容ではありますが、拙著が現代の音楽教育の一助となることを強く願っております。



## 『名望家と「開化」の時代 — 地域秩序の再編と学校教育』

教育学研究科博士後期課程 平成25年3月修了 塩原 佳典  
日本学術振興会特別研究員PD

幕末維新期、社会の諸側面で近代化が推進されるなか、伝統的な地域秩序はいかに動揺し変容したのか。その過程を、「開化」の時代を生きた名望家たちの視点からとらえ直すこと。これが、拙著で取り組んだ課題です。

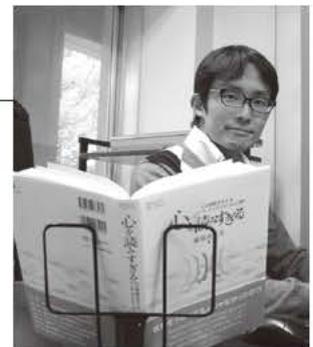
その際、①名望家たちが取り結んでいた地域社会の権力的・序列的諸関係への着眼から、彼らがなぜ「開化」を担ったのか（担わざるをえなかったのか）を検討しました。②名望家たちの活動が、教育・政治・勤業など諸領域を横断していた事実に着目し、「開化」のメディアの一環としての近代学校像を浮き彫りにしました。

拙著をまとめるまでに、教育学研究科のみならずはじめ、多くの方々と議論を重ねる機会に恵まれました。この場を借りて、お礼を申し上げます。

## 『心を読みすぎる — 心の理論を支えるワーキングメモリの心理学』

教育学研究科博士後期課程 平成21年5月修了 前原由喜夫  
長崎大学教育学部 准教授

新学期開始の慌ただしさ極まる最中、「えっ、ご存じなかったんですか？」新任教員の私は度々こう言われてしまう。このように、自分が知っていることを相手も知っているものだと思い込んでコミュニケーションをとってしまうことは、私たちが日常的によく経験することである。自分の知識を相手の心に投影しているだけなのに、相手の心を読みすぎている、つまり「あなたの心はわかりすぎている！」と勘違いしてしまう現象を本書では「心を読みすぎ」と名付け、心理学実験の手法を用いてその認知的メカニズムを解明することを試みた。本書は私たちがいかに容易く「心を読みすぎ」を犯してしまうかを明らかにし、「心を読みすぎ」が原因となるトラブルの予防策に対して心理科学的助言を提供するものだと思っている。



総務掛長

着任して3か月が過ぎようとしているが、ここ教育学研究科に着任して思い出したことがある。平成10年4月、京都大学に採用されたとき、私は「生涯学習にたずさわりたい。」という希望を持っていた。実際に私は総務部研究協力課(当時)に採用され、念願かなって公開講座(春秋講義や市民講座)の担当になり、シニア世代の常連客を相手に、様々な部局・分野の先生方に講義をしていただき、市民の皆さんが喜んでくれる姿に触れることができた。

しかし、そこでわかったのは、国立大学である京都大学は研究機関であり、あくまでも研究成果の国民への還元という側面から公開講座が行われており、高等教育機関として生涯学習を担うという目的が第一義ではないということだった。もっとも、国立大学が法人化された現在では、その認識も相当変化していると感じる。

3年が過ぎた頃、当時の総務部長から「ひなちゃん、若いうちに文科省に行っておいで。」と言われ、厚かましくも「生涯学習局なら行きます。」と回答した。すると、生涯学習局の一部と体育局が統合されてきた、スポーツ青少年局青少年課というところに併任とい

う形で1年間配属された。

青少年課では、1年のうち半年は文科省からさらに内閣府に併任し、「東南アジア青年の船」という事業の管理部長として乗船した。残り半年は青少年の健全育成のためのいくつかのプロジェクトに参加させてもらった。その中で、地方公共団体が実施する子どもの社会教育(農業体験活動、商店街へのインターンシップ、国際交流活動など)に予算を配分し、活動が適切に行われたかをチェックする仕事を担当した。そこでは、全国の市町村から届く活動報告に掲載されている子供達の生き生きとした笑顔の写真を見て、いつか現場に行きたいと温かい気持ちになったことを覚えている。また、全国の市町村教育委員会の担当者との方言交じりの会話を通じて人脈も価値観も広がった。毎日夜中3時にタクシーで帰宅し、2.3時間後には電車で寝ながら出勤という生活も、若さと仕事の楽しさで苦ではなかった。

その後、大学に戻り、すっかり子どもの社会教育や生涯学習とは縁遠くなった。ところが、この4月に教育学研究科に着任するやいなや、教育実践コラボレーションセンターや臨床教育実践研究センターなどで行われている社会に寄り添った活動実績に触れ、新人の頃の気持ちがふつふつと戻ってきた。さらに二児の母となった今、最先端の教育学研究に触れるのも大変貴重で面白い。

昨年亡くなった父が大学4年生の私にくれた「京都大学で出会う人々は、きっとお前のこれからの人生を豊かにする。」という言葉を実感している。これから楽しくなりそうである。

## 諸 記 録

### 2013年11月～2014年4月のおもな出来事

#### 2013年11月

- 2日(土) 京都大学教育学部同窓会(京友会)総会・講演会・懇親会(教育学部本館1階第1会議室)
- 7日(木)-8日(金) 教育実践コラボレーション・センター(教育空間創造ユニット)主催  
親子合宿(京都府綾部市里山交流センター)
- 14日(木) 和歌山県教育委員会との連携協力 京都大学研修ツアー(桐蔭中学校)
- 16日(土) 大学院教育学研究科、教育学部3年次編入 入試説明会(文学部校舎)
- 29日(金)-30日(土) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト 大学院生交流活動  
(中国・北京師範大学)

#### 2013年12月

- 10日(火) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト  
講演・対論会「生命科学に基礎づけられた教育の可能性—学生たちとの対話で未来を育む—(第1回)」  
(教育学部本館第1会議室)
- 11日(水) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト Christian Roesler博士講演会  
(教育学部本館1階第1会議室)
- 12日(木) 教育実践コラボレーション・センター主催 E.FORUM教育研究セミナー  
「『教職の高度化』をどう構想するか」(法経済学部本館)
- 17日(火) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト  
講演・対論会「生命科学に基礎づけられた教育の可能性—学生たちとの対話で未来を育む—(第2回)」  
(教育学部本館第1会議室)
- 23日(月) 科学研究費補助金・卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト共催

公開研究会「新教育運動期における学校の『アジール』  
—アメリカ・イギリス・ドイツ・日本の比較史的考察の試み—」(芝蘭会館別館 研修室)

### 2014年1月

11日(土)-12日(日) 大学院教育学研究科・マンチェスター大学芸術言語文化学部日本研究学科  
国際会議(京都大学百周年時計台記念館)

### 2014年2月

9日(日) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト  
講談師・日向ひまわり氏講演会(教育学研究科 総合研究2号館)  
11日(火) 観世流シテ方能楽師 準職分 青木健一氏  
講演「能と心理療法～『引き受ける』ということ～」(関西セミナーハウス)  
13日(木) 第1回 発達科学国際セミナー(教育学部本館第1会議室)  
20日(木) ハラスメント防止に関する研修会 しぶや総合法律事務所・渋谷元宏弁護士(教育学部本館)  
21日(金) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト  
エディンバラ大学Robert Howie Logie教授講演会(教育学部本館第1会議室)  
23日(日) 卓越した大学院拠点形成支援補助金プロジェクト 若手国際ワークショップ(百周年時計台記念館)

### 2014年3月

1日(土) 教育実践コラボレーション・センター(教育空間創造ユニット)主催  
「童仙房セミナー 国際的に見た教育の動向と日本の教育課題」(京都府南山城村旧野殿童仙房小学校)  
5日(水) 特色入試研究会 (立命館宇治高等学校)  
9日(日) 特色入試研究会 (京都市立堀川高等学校、京都府立洛北高等学校)  
15日(土) 静岡大学教育学部・東京大学・東京学芸大学・京都大学・関西教育行政学会共同企画  
「教師教育・教育委員会に関する日米教育改革交流シンポジウム」(総合研究2号館)  
18日(火) 研究大学強化促進事業、京都大学融合チーム研究プログラム  
シンガポール南洋理工大学Prof. Ying-yi Hong教授講演会(教育学部本館)  
25日(金) 教育学部同窓会主催 卒業生歓送会(教育学部本館)  
29日(土) 教育実践コラボレーション・センター主催  
2013年度E.FORUM全国スクールリーダー育成研修「第9回実践交流会」(総合館東棟)

### 2014年4月

17日(木) 教育学部同窓会主催 新入生歓迎会(百周年時計台記念館国際交流ホール)

## 平成26年度入試結果

教育学部	日 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	前期日程	文 系	5 0	1 5 9	1 5 7	5 0	6 2
理 系		1 0	4 4	4 4	1 2		
第3年次編入学			1 0	2 0	2 0	6	6

教育学研究科	課 程 等		募集人員	志願者数	受験者数	合格者数	入学者数
	修士 養成 コース	教育科学専攻	1 8	4 1 (3)	4 0 (3)	1 9 (2)	1 9 (2)
		臨床教育学専攻	1 4	4 0 (2)	4 0 (2)	1 4 (1)	1 4 (1)
	課 程	教育科学専攻(専修コース)	1 0	3 2	3 1	9	9
		臨床教育学専攻(第2種)	若干名	0	0	0	0
	博士後期課程臨床教育学専攻 (臨床実践指導者養成コース)		4	1 3	1 3	5	5
博士後期課程編入学		若干名	1 1 (3)	1 1 (3)	3 (1)	3 (1)	

( )内の数は外国人留学生で内数

## 平成25年度学位授与件数

(H26.3.31現在)

学位名等	授与者数	
学士 教育科学科	6 3	
修士	教育科学専攻	2 7
	臨床教育学専攻	1 1
博士	課程博士	1 3
	論文博士	4

## 教育職員免許状取得状況

平成25年度(2013)

中学校専修免許状	0
中学校1種免許状	3
高等学校専修免許状	0
高等学校1種免許状	8
特別支援学校1種免許状	0

## 人事異動 (H25.11.2~H26.6.5)

■平成25年11月29日付け  
SCHULMAN, Gustav 外国人研究員 (客員教授)  
(附属臨床教育実践研究センター) 任期満了

■平成25年12月5日付け  
採用

■平成26年1月1日付け  
地域連携教育研究推進ユニットへ配置換

■平成26年3月1日付け  
採用

■平成26年3月31日付け  
角野 善宏 教授 (附属臨床教育実践研究センター) 退職  
森崎 志麻 助教 (心理臨床関連) 退職  
濱 貴子 助教 (教育社会学講座) 退職  
退職  
任期満了  
任期満了

永山 智之 研究員 任期満了  
李 霞 研究員 任期満了  
橋本 京子 研究員 任期満了  
WU, Han 研究員 任期満了

任期満了  
任期満了

■平成26年4月1日付け  
子安 増生 教授 研究科長・学部長 (任期26.4.1-28.3.31)  
稲垣 恭子 教授 副研究科長 (任期26.4.1-28.3.31)  
鈴木 晶子 教授 副研究科長 (任期26.4.1-28.3.31)  
駒込 武 教授 現代教育基礎学系長 (任期26.4.1-27.3.31)

楠見 孝 教授 教育心理学系長 (任期26.4.1-27.3.31)  
杉本 均 教授 相關教育システム論系長 (任期26.4.1-27.3.31)

桑原 知子 教授 国際高等教育院へ配置換  
(大学院教育学研究科併任)  
高見 茂 教授 国際高等教育院より配置換

明和 政子 教授 (教育方法学) 昇任

岡野憲一郎 教授 (附属臨床教育実践研究センター) 採用  
高橋紗也子 助教 (心理臨床学講座) 採用

退職

北部構内経理課課長補佐(農場移転担当)へ配置換  
総務部企画課企画掛長へ配置換  
北部構内教務・図書課理学  
研究科学部教務掛主任へ配置換  
(こころの未来研究センター担当)  
こころの未来研究センターへ配置換  
(こころの未来研究センター担当)  
こころの未来研究センターへ配置換

プロバティ運用課長から配置換  
経済学研究科 総務掛長から配置換  
医学部附属病院 経営管理課 財務掛から配置換

小山内秀和 研究員 採用  
福山 寛志 研究員 (教育方法学) 採用

採用  
採用  
採用  
採用

■平成26年6月5日付け  
採用

## 科学研究費補助金

26年度

研究種目	研究題目	研究担当者
新学術領域研究 (研究領域提案型)	周産期からの身体感覚と社会的認知の発達の関連性の解明に基づく障害理解	明和 政子
新学術領域研究 (研究領域提案型)	思春期における自己制御の発達と学校・社会適応との関連に関する行動遺伝学的研究	高橋 雄介
新学術領域研究 (研究領域提案型)	物語における時間情報に基づく視点取得メカニズム	米田 英嗣
基盤研究(A)一般	21世紀市民のための高次リテラシーと批判的思考力のアセスメントと育成	楠見 孝
基盤研究(A)一般	学校を中心とする教育空間における力動的秩序形成をめぐる多次元的研究	桑原 知子
基盤研究(B)一般	ヒトの養育行動における快情動の役割とその進化的基盤	明和 政子
基盤研究(B)一般	青年期メディアとしての雑誌における教育的機能に関する研究	佐藤 卓己
基盤研究(B)一般	「失われた10年」以後の教育機会とライフコースに関するパネル調査研究	岩井 八郎
基盤研究(B)一般	パフォーマンス評価を活かした教師の力量向上プログラムの開発	西岡加名恵
基盤研究(B)一般	「新しい公共」枠組み下のソーシャル・ファイナンスを通じた教育資源調達手法の研究	高見 茂
基盤研究(B)一般	日英の女性医療専門職の生涯キャリアと養成・支援に関する総合的研究	渡邊 洋子

研究種目	研 究 題 目	研究担当者
基盤研究(B)一般	アジアの「体制移行国」における高等教育制度の変容に関する比較研究	南部 広孝
基盤研究(B)一般	戦後日本の指導者の「ハビトゥス」形成と「界」の構造に関する実証的研究	稲垣 恭子
基盤研究(B)一般	戦後東アジア諸地域における教育の比較史的分析—冷戦と植民地主義に着目して—	駒込 武
基盤研究(B)一般	21世紀型コンピテンシー育成のためのカリキュラムと評価の開発	矢野 智司
基盤研究(C)一般	オールタナティブ教育における「稽古」の思想と「宗教性・精神性」の教育人間学的解明	西平 直
基盤研究(C)一般	<レジリエントな個>の育成とアメリカ実践哲学：哲学と教育のクロスカレント研究	齋藤 直子
基盤研究(C)一般	教師の熟達とキャリア形成に関する日独比較研究 —教師力としての教育的タクトを軸に	鈴木 晶子
挑戦的萌芽研究	専門職教育者のIPE（異業種連携教育）基盤型研修プログラムの実践開発研究	渡邊 洋子
挑戦的萌芽研究	自閉症スペクトラム障害をもつ青年および児童に対する日常生活スキル支援の研究	米田 英嗣
若手研究(B)	高等学校における教育資源配分の効率性および多面的な教育資源調達手法の検討	江上 直樹

## 外部資金受入れ

### 寄附金

名称・目的	寄附者	担当者
(名称) 日本経済研究センター研究奨励金 (目的) 戦時期における経歴の流動化と戦後階層システムの形成に関する数量社会学研究	公益財団法人 日本経済研究センター 代表理事・理事長 岩田一政	岩井 八郎
(名称) 「創造性研究奨励賞」授賞による研究者支援助成金 (目的) 同上	NPO法人ニューロクリエイティブ研究会	明和 政子
(名称) 第9回 児童教育実践についての研究助成事業 (目的) 物語読解による他者理解能力向上のメカニズムの解明	公益財団法人 博報児童教育振興会 常務理事 黒木 文雄	小山内 秀和

### 受託研究

名称・目的	委託者	担当者
(名称) JST受託研究 (目的) 情動発達評価システムの構築	独立行政法人科学技術振興機構 分任研究契約担当者 執行役(戦略的創造研究推進事業担当) 小原 英雄	明和 政子

## ハラスメント防止に関する研修会

本研究科・学部では、教職員及び学生等の人権、特にハラスメントの認識をより深め、「ひと」としての人格や尊厳を高めハラスメントの防止を図ること、さらに就労上又は修学上の適正な環境を築くため、毎年、研修会を開催しています。

平成25年度は、平成26年2月20日（木）に開催し、しぶや総合法律事務所 弁護士 渋谷元宏氏による講演が第1会議室であり、教員、事務職員の約30名程度の参加を得て、意識を高める機会となりました。



## 諸 報

### 新任教員・事務職員紹介（「 」内は本人の抱負）



岡野 憲一郎 教授

所属講座：臨床心理実践学講座  
専 門：心理療法、力動精神医学

「以前からあこがれていた京都に教員として着任いたしました。精神科医の立場から心理臨床を志す方々のお力になれるよう頑張ります。」



高橋 紗也子 助教

所属講座：心理臨床学講座  
専 門：高齢者心理臨床

「4月より着任いたしました。学生の学び・研究・実践のお手伝いが出来ればと思っております。よろしくお願い致します。」

#### 事務長

「4月からお世話になっております。微力ではありますが、皆様の教育・研究の推進に寄与できるよう努力したいと思っております。よろしくお願い致します。」

#### 掛員

所属 掛：教務掛

「念願の教務掛に配属され、とても嬉しいです。早く皆さんのお役に立てるよう頑張ってお参りますので、よろしくお願い致します。」

#### 掛長

所属 掛：総務掛

「総務掛長は信頼されてはじめて務まる職だと思っております。ご指導方よろしくお願致します。」

#### 派遣職員

所属 掛：教務掛

「6月より教務掛でお世話になっております。お役にたてるよう頑張りたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。」

## 編集後記

今年も春がやってきました。桜舞うキャンパス内は、早足で歩く新入生や進級生で賑わっています。その表情は、緊張感、躍動感に満ち溢れ、見ているこちらもうれしくなります。肌をなでるさわやかな春風は、心まで一新してくれるようです。春には「新」という文字がよく似合います。

今、日本の高等教育は、これまでの古きを脱ぎ捨て、新しきを目指す方向へと舵が切られようとしています。入試制度改革、グローバル化、国際競争力の強化。次世代のための教育、人類の幸福と社会の発展のための研究の向上につながる、真の新しさとは何なのでしょう。いつもと変わらぬ春がもたらしてくれた新しい生命の息吹を感じながら、その答えをいまだ見いだせずにいます。(MM)

## 京都大学教育学研究科・教育学部広報委員会

委員長 明和 政子 教授(教育方法学講座)

委 員 田中 孝二 事務長

委 員 子安 増生 教授(教育学研究科長・教育学部長)

委 員 古屋 比奈 総務掛長

委 員 田中 康裕 准教授(心理臨床学講座)

委 員 中尾 知里 教務掛長

委 員 佐藤 卓己 准教授(生涯教育学講座)

#### ■事務担当

教育学研究科・教育学部総務掛  
TEL 075(753)3003